

# Hukutana

# 16

September 2000  
2000年9月

# ふくたな

- 1... 第138回 学振セミナー 138<sup>th</sup> JSPS Seminar  
秋吉博之:ケニア共和国における中等教育の現状と課題  
-生物教育の現状調査を通して  
AKIYOSHI Hiroyuki: The Teaching and the Learning of Biology in Kenyan  
Secondary Schools -The Past, the Present and the Future
- 2... はじめまして/おひさしぶりです Hamjambo?  
高橋真央・斉藤翠・清水真理子・實吉玄貴・木村有紀・永野甲人・衣笠聡史  
TAKAHASHI Mao, SAITO Midori, SANEYOSHI Mototaka, KIMURA Yuki,  
NAGANO Kanto, KINUGASA Satoshi
- 4... センター行事/業務案内 Meetings, Events
- 5... センター往来 Visitors
- 6... 編集後記 Editor's Note

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュースレター

JSPS Seminar

## 第138回学振セミナー 138<sup>th</sup> JSPS Seminar

演者: 秋吉博之(神戸大学大学院国際協力研究科/  
国際協力事業団ケニア 中等理数科教育改善計画)  
演題: ケニア共和国における中等教育の現状と課題-生物教育の現状調査を通して  
場所: 日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター  
日時: 2000年7月1日(土) 14時~16時  
参加: 36名

Speaker: AKIYOSHI Hiroyuki (Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University,  
and Strengthening of Mathematics and Science in Secondary Education Project,  
Japan International Cooperation Agency)  
Title: The Teaching and the Learning of Biology in Kenyan Secondary Schools  
-The Past, the Present and the Future  
Place: JSPS Research Station, Nairobi  
Date: 1st July 2000 (Saturday), 14:00 to 16:00  
Participant: 36 persons

社会人大学院生とJICA 専門家の二つの顔を持ち、教育援助の現場で調査と実践を続けられる神戸大学の秋吉さんに、ケニアの現状についてお話を願いました。8月に任期を終えて帰国される前の報告となりました。

Mr. AKIYOSHI presented a report on the education system in Kenya, comparing it to that in Japan. He has many experiences of teaching biology in secondary schools. This was a preliminary report of his activity in Kenya for two years.

1. はじめに
2. ケニアの中等生物教育  
2-1. 教育制度  
2-2. シラバス
3. ケニアの中等生物教育の現状  
3-1. アンケート  
3-2. 授業観察
4. ケニアの中等生物教育の課題
5. おわりに

Millma hukutani, lakini binadamu hukutana  
山と山は出会わないが、人は出会うものだ (スワヒリ語のことわざ)  
Mountains never meet, but human beings do - Swahili proverb

## はじめまして／お久しぶりです Hamjambo?

### 高橋真央 TAKAHASHI Mao

今年の夏は、例年のないほどの「酷暑」だと言われていましたが、その暑さの最中の日本を発ち、内海教授のご指導のもと、ケニアの二つの小学校で赤土にまみれながら、子ども達の体重や身長を計り続けていた日々が懐かしく思い出されます。私自身にとって初めてのアフリカ大陸は、何もかもが新鮮であると同時に多くのことを考えるための課題を与えてくれました。それは、マサイの小学生たちだけではなく、ナイロビの学振センターで出会った方々など、行く地で出会った全ての人との出会いでした。ナイロビで滞在した時間は、

約二週間といったごくわずかなものでしたが、その日々を通して指導教官をはじめ、多くの方から頂いたメッセージをしっかりと心に留め、「21世紀を共に生きることの難しさと素晴らしさ」を感じ、考え、そこから私自身の研究に生かしていきたいと思っております。

大阪大学大学院人間科学研究科  
Graduate School of Human Science, Osaka University  
ボランティア人間科学コース

### 斉藤 翠 SAITO Midori

7月中旬の約2週間、教授の調査についてケニアを訪れました。ヨーロッパ以外の外国に行ったことがなかった私は、空港に着いた時すでに日本との違いに緊張していました。

調査は車で3時間程かかるナロックという地区に行きました。日本では考えられないほど小さな小学校。電気がなく、薄暗い教室。ケニアではそれは当たり前のことかもしれません。しかし、日本以外の小学校を直接見たことがなかった私には、衝撃が大きかったです。

子どもたちは、泣く、わめく、そしてそのあげくにはからかう、そして、にっこり笑う、はにかむ。日本の子どもと変わらず、愛らしかった。

実際にその子ども達と接して調査の補助(になっていたのか?)をできたことを貴重な時間だったと思います。

そして、これからは空港に着いただけで緊張しないように、諸国で経験をつんでいけたら、と思います。

最後に、冬だということが大きいと思いますが、ケニアはなんと過ごしやすい気候なのだろうと感じました。ナイロビから真夏の関西に帰った途端、あまりの日本の蒸し暑さにケニアに帰りたくなったのでした。

大阪大学大学院人間科学研究科  
Graduate School of Human Science, Osaka University  
ボランティア人間科学コース

### 清水真理子 SHIIZU Mariko

タンザニアのカスル(キゴマの北)に向かう途中、センターに立ち寄りさせていただきました。国際協力の世界に足を踏み入れたばかりの私の旅は、「アフリカを肌で感じる」ということをひとつの目的としていました。タンザニアでは、昨年「世界青年の船」で知り合った友人宅にずっとホームステイしました。キゴマは予想以上に遠く、一瞬日本に帰れないかと思いましたが、難民キャンプの様子も少しのぞくことができ、やはり最も心に残る場所となりました。国際協力の現場を自分

の目で見て、たくさんの方にお話をうかがい、自分自身のモチベーションを大いに高めることができましたと感じています。センターで研究者の方々と同じ空気を吸えたことも、私にとってはかなりの刺激となりました。大変お世話になり、ありがとうございました。

大阪大学大学院人間科学研究科  
Graduate School of Human Science, Osaka University  
ボランティア人間科学コース

## ■ 實吉玄貴 ■ SANEYOSHI Mototaka

島根大学の實吉(さねよし)と申します。リフトバレーの地質を調査しにケニアにやってきました。私は京都大学の石田先生の隊の一員として、化石が多産する北ケニア・サンプルヒルズの地質を調査しました。目的は、それらはどんな所であったのか? という堆積環境の復元と化石が偏在するメカニズムの解明にあります。憧れのアフリカに三ヶ月も滞在できて、大変に貴重な経験をさせていただきました。三ヶ月間という時間は

思ったよりも長いようで短い時間に感じられます。また戻ってこられるものなら戻りたいと思います。石田先生・内海先生・その他お世話になった方々、本当にありがとうございました。

---

島根大学大学院総合理工学研究科  
Interdisciplinary Graduate School of Science and Technology,  
Shimane University

---

## ■ 木村有紀 ■ KIMURA Yuki

6年ぶりのナイロビです。前回、ナイロビに来たのは1993年のこと、D論文の資料調査のため、1年間にわたってナイロビに滞在していました。あれから6年もたっているとは、我ながら驚きです。

私は考古学が専門で、人類最古の石器文化であるオルドヴァイ文化の石器をテーマにしています。今回は、博物館で180万年前の石器を3ヶ月間ながめて過ごす予定です。ちなみに、今回は160万年前の石器を1年間ながめていました。そのうち、100万年前、50万年前…と徐々に人類の歴史を辿っていく予定です。人類文化の進化と共に私も年をとっていくことでしょう。

久しぶりのナイロビは、車が増えて渋滞が激しくなっているというのが第一印象です。毎日博物館まで歩いて通っていますが、道路を横切るのが一苦労で、もう何度か死にかけています。博物館下のラウンドアバウトで佇みながら、太陽電池で動く信号をなんとか

設置してもらえないだろうかと思う毎日です。

また、きれいな建物やお店が増えて、物が豊富になったと思います。サリットは大きくなり、ナクマットが出現し、ウチュミやテキストブックセンターはまるで別の店のようにきれいになっていました。6年前は、ティッシュ1つにしても、質の悪いものしかなかったのに、今では日本と変わらないものが簡単に手に入ります。

ナイロビは暮らしにくくなっているのか、暮らしやすくなっているのか、ちょっと判断しかねます。来年、再来年も訪れたいとは思っていますが、あまり先のことを計画しないというのも、アフリカ研究者として重要な心得かもしれません。

---

筑波大学歴史・人類学系  
Institute of History and Anthropology, University of Tsukuba

---

## ■ 永野甲人 ■ NAGANO Kanto

アフリカを訪れるのは2回目になります。1回目は青年海外協力隊員としてタンザニアでの2年間の滞在でした。

今回は7月14日にケニアに到着し、カカメガの森を訪れました。8月中旬から10月の初めまでタンザニアのコーストの町タンガで、酒場、地酒の研究をしていました。

調査を始めた当初、酒をあまり飲まずに酔ったふりをし、相手にできるだけ飲ませて自分自身は酔わないようにと、心がけていました。が、すすめられる酒を断るのも難しく、結局飲んでいました。

朝からマリファナを吸い、密造酒を飲んでいる人々

であふれるfujoな(騒がしい)酒場も好きですが、こじんまりした民家の一室でママの造る地酒を4、5人でまわし飲みするのも好きになりました。

一ヶ月半という短い調査期間で、やり残した事もあり心残りですが、日本に帰ってからは、日本の地酒について勉強したいと思います。

---

山口県立大学大学院国際文化研究科  
Graduate School of International Studies,  
Yamaguchi Prefectural University

---

## 衣笠聡史 KINUGASA Satoshi

ケニアの隣のタンザニアのセレンゲティ国立公園の地表面に散乱している石器の分布を調査して、過去の人類の資源や土地の利用のパターンを明らかにしようと研究を進めています。今年度もタンザニアで約1ヵ月間の調査を終えて、11月1日にナイロビに戻ってきたばかりです。ケニアでの調査は、これからですが、ナイバシャ湖の周辺でセレンゲティ国立公園の石器の原

材料の一つである黒曜石のサンプルを収集する予定です。今後ともよろしくお願ひします。

筑波大学歴史人類学研究科  
Doctoral Program in History and Anthropology,  
University of Tsukuba

## センター行事 Meetings, Events

### 7月/July

- 1 第138回学振セミナー。演者秋吉博之(神戸大学国際協力研究科/JICA SMASSE)詳細1頁
- 13 巻島カンバラへ研究者の調査地視察(マケレレ大学他)。15日まで
- 16 内海モンバサへ視察。17日まで

### 8月/August

- 11 「ふくた一な」14号(2000年3月号)発送
- 26 内海グアテマラへ出張。10日まで

### 9月/September

- 15 巻島モーリシャスへ島嶼植物相の調査。20日まで
- 27 内海成治短期派遣研究員(大阪大学人間科学部)離任、帰国

## 業務案内 郵便物発送・受取

調査のためケニアに入っている研究者の方などのため、郵便物の受取をしております。ケニアには郵便物の宅配制度がないため、郵便局の私書箱宛の配達となります。学振ナイロビセンターの私書箱を受取先としてご利用下さい。毎日午前と午後に出取に行っています。

小包の受取は宛先人のIDまたはパスポートのオリジナルが必要なため、駐在員気付で送ってくださると取り出し・通関が簡単です。  
エメールの場合、大半は1週間で到着します。

## センター往来 Visitors

7月/July

- 6 高橋真央 TAKAHASHI Mao, 斉藤翠 SAITO Midori (大阪大学大学院人間科学研究科 Osaka University)
- 10 實吉玄貴 SANEYOSHI Mototaka (島根大学大学院理学研究科 Shimane University)
- 11 Charles Macharia (Institute of African Studies, University of Nairobi)
- 11 S. K. Kibe (JICA Kenya)
- 14 安溪遊地・貴子 ANKEI Yuji & Takako, 永野甲人 NAGANO Kanto (山口県立大学国際文化研究科 Yamaguchi Prefectural University)
- 16 石田英実 ISHIDA Hidemi (京都大学大学院理学研究科 Kyoto University)
- 17 清水大輔 SHIMIZU Daisuke, 高野智 TAKANO Tomo (京都大学大学院理学研究科 Kyoto University)
- 20 吉田未穂 YOSHIDA Miho (東京都立大学大学院理学研究科 Tokyo Metropolitan University)
- 22 湯川恭敏 YUKAWA Yasutoshi (東京大学文学部 University of Tokyo)
- 29 太田至 OHTA Itaru (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 Kyoto University)
- 31 宮本律子 MIYAMOTO Ritsuko (秋田大学教育文化学部 Akita University)
- 31 清水真理子 SHIMIZU Mariko (大阪大学大学院人間科学研究科 Osaka University)

8月/August

- 2 鹿野一厚 SHIKANO Kazuhiro (島根女子短期大学 Shimane Woman's College)
- 2 足達太郎 ADATI Taro (International Centre of Insect Physiology and Ecology)
- 3 佐藤俊 SATO Shun (筑波大学歴史・人類学系 University of Tsukuba)
- 4 大隅紀和 OSUMI Norikazu (京都教育大学教育実践総合センター Kyoto University of Education)
- 5 中村香子 NAKAMURA Kyoko (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 Kyoto University)
- 8 小田亮 ODA Makoto (成城大学文芸学部 Seijo University)
- 片上英俊 KATAKAMI Hidetoshi (東京都立大学大学院社会科学研究科 Tokyo Metropolitan University)
- 11 高岡貞夫 TAKAOKA Sadao (専修大学文学部 Senshu University)
- 12 菊地滋夫 KIKUCHI Shigeo (明星大学人文学部 Meisei University)
- 14 松園万亀雄 MATSUZONO Makio (東京都立大学大学院社会学研究科 Tokyo Metropolitan University)
- 14 岸田信高 KISHIDA Nobutaka (Trans World Minerals, Kenya)
- 14 椎野若菜 SHIINO Wakana (東京都立大学大学院社会科学研究科 Tokyo Metropolitan University)
- 21 和田正平 WADA Shohei (甲子園大学人間文化学部 Koshien University)
- 21 山極寿一 YAMAGIWA Juichi (京都大学大学院理学研究科 Kyoto University)
- 22 桂井宏一郎 KATSURAI Koichiro, 柳原由美子 YANAGIHARA Yumiko (敬愛大学国際学部 Keiai University)
- 26 松田素二 MATSUDA Motoji (京都大学文学部 Kyoto University)
- 28 養老孟可 YORO Takeshi

9月/September

- 4 Kanyunyi Augustin Basabose (Centre de Reserche Sciences Naturelles, Lwiro, Democratic Republic of Congo)
- 4 栗本英世 KURIMOTO Eisei (大阪大学大学院人間科学研究科 Osaka University)
- 11 湯本貴和 YUMOTO Takakazu (京大学生態学研究センター Kyoto University)
- 15 Isaac K. Nyamongo (Institute of African Studies, University of Nairobi)
- 15 木村有紀 KIMURA Yuki (筑波大学歴史・人類学系 University of Tsukuba)
- 衣笠聡史 KINUGASA Satoshi (筑波大学歴史・人類学研究科 University of Tsukuba)
- 19 中務真人 NAKATSUKASA Masato (京都大学大学院理学研究科 Kyoto University)
- 19 澤村信英 SAWAMURA Nobuhide (広島大学教育開発国際協力研究センター Hiroshima University)
- 22 加賀谷良平 KAGAYA Ryohei (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 Tokyo University of Foreign Studies)
- 28 根岸精一 NEGISHI Seiichi, 吉田隼人 YOSHIDA Hayato (神戸大学大学院国際協力研究科 Kobe University)
- 29 Michael Huffman (京都大学霊長類研究所 Kyoto University)

## 編集後記

ナイロビでの滞在を利用して、ケニア南西部のナロック県で小学校の調査をしている。ナロックはマサイの土地である。ナイロビから150キロくらい、マサイマラ国立公園へ行く途中である。幹線道路はいい道であるが、学校へのアクセス道路はかなりの悪路である。一度バンクして往生したが、ここではあたりまえのこと。

多くのマサイの子供たちが学校にこない、また就学しても卒業するのは30%未満である。独立以来多くの努力を重ねてきた学校教育がうまくいっていない。確かに都市での就学率は90%位である。しかし農村部や辺境部は30%を切っているのである。学校教育は伝統的社会とうまく折合っていない、どうしてなのか。教育省や県のインスペクターは経済的要因や文化的背景だという。マサイの社会と学校をめぐる状況は複雑である。彼らは文字どおり「現在に生きる遊牧民」なのである。単一なアプローチは無意味なのである。であるならば状況に即して共に歩むことしかできないのだと思う。

今年のケニアは水不足である。学校も水に困っている。子どもも親と牛とともに水と草を求めて遠くの地にいる。子どもの数は少なくなっている。でもいつもの通りに学期が始まり、いつものように休み中の補習もやっていた。

アフリカでの調査は悪い道とほこりとの戦いである。でもそれがだんだんうれしくなってきた。そうすると日本との相性が悪くなってくる。日

本との相性の悪い多くの先生方や学生諸君との話の時の時間が至福の時間である。大分重症だがそれもいいのだとおもう。(内海)

「はじめまして/お久しぶりです」特集となりました。7,8,9月は御存知のように調査のシーズン、初めてケニアを訪れる若手研究者の来訪の多いときでもあります。ナイロビの昼行灯としては、このときばかりは出番かとも思います◆高橋・斉藤・清水の三續は短期滞在の内海の学生、国際協力の新風をナイロビセンターに吹き込んでくれました◆木村・衣笠のお二人は石器時代の考古学◆實吉氏は実は昨年ケニアで調査経験あり◆ウガンダは長い混乱の時代を終えたためか、人々の顔が明るく見えたのが印象的。カンバラの夜出歩ける治安の良さも驚き。日本人研究者もこれから増えるのでしょうか◆島嶼植生を見に行ったモーリシャスは絶滅したドーダーがマスコットになっている少し皮肉な状況◆センター事務所のすぐそばのRiverside Driveにマサイのウシの群が通るのも珍しくない早鮭のナイロビ、この数日やっと雨が降りはじめましたが、水不足はしばらく続きそうです◆内海さんには広く日本と世界の関係を見る分野の存在を4か月間の任期中見せていただきました。多謝◆発行日は9月末と奥付にありますが、実は11月上旬の編集です。前号もほぼ3か月遅れの発行となってしまいました。編集の遅れを取り戻し、日付通りの発行を目指します(巻島)

© 2000 Japan Society for the Promotion of Science, Research Station Nairobi. All rights reserved.

### Hukutana No. 16

Bulletin of Japan Society for the Promotion of Science,  
Research Station, Nairobi  
Issued: 30th September 2000

Editor: UTSUMI Seiji and MAKISHIMA Haruyuki  
Publisher: JSPS Research Station, Nairobi, KENYA  
Printer: Jarolin Enterprises, Nairobi, KENYA

For rights of reproduction, application should be made to the JSPS Research Station, Nairobi. The views expressed in the articles of this bulletin are those of the contributors and do not necessarily reflect the views of JSPS.

### ふくた一な◇第16号

日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターニュース  
発行日◇2000年9月30日  
編集・発行者◇内海成治・巻島美幸  
発行所◇日本学術振興会ナイロビ研究連絡センター

本誌の掲載記事を転載する場合は、事前にセンターまでご連絡下さい。本誌の中で署名のある記事についてはそれぞれの主張・意見は執筆者個人のもので、日本学術振興会の見解を反映するものではありません。

Phone: +254-2-442424; Fax: +254-2-442112; e-mail: jspst1@africaonline.co.ke

JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE,  
RESEARCH STATION NAIROBI  
P. O. Box 14958  
NAIROBI, KENYA

PAR AVION  
VIA AIR MAIL